

## 植民地朝鮮における普成専門学校の スポーツ活動に関する考察

金 誠

### 1. 本研究の目的と方法

#### 1) 本研究の目的

本研究は植民地期の朝鮮半島で活躍をみせた普成専門学校のスポーツ活動に着目し、その実態を明らかにしようとするものである。

普成専門学校は現在の高麗大学の前身であり、その歴史は1905年から始まる。植民地期においては朝鮮人子弟の通う高等教育機関としてその存在は際立っていた。そのため普成専門学校のスポーツ活動を明らかにすることで当該期における朝鮮人らのスポーツに対する価値観や機能を垣間見ることができるだろう。

また普成専門学校の校長を務めた金性洙という人物の存在にも着目したい。植民地社会のなかで朝鮮民族にとってスポーツはどのような価値を持っていたのか、またその発展をどのように支えようとしていたのかという点を金性洙との関わりから見出そうとする。

植民地権力のなかで被支配民族にとってスポーツは如何なる価値をもつものであり、その実態は如何なるものであったのだろうか。普成専門学校のスポーツ活動の実態を明らかにすることで植民地社会におけるスポーツの位置づけを考察していく。

#### 2) 本研究の方法

##### ① 先行研究について

普成専門学校については国立大学設立運動に関わる研究<sup>1)</sup>や金性洙に関わる研究<sup>2)</sup>は

<sup>1)</sup> 馬越徹、「日本統治下朝鮮における民族的大学観の形成—「朝鮮国立大学」設立運動と普成専門学校を中心に—」、『大学論集』第12集、p.99-120、広島大学大学教育研究センター、1983.12。

<sup>2)</sup> 例えば、徐南順『仁村 金性洙의 生涯와 業績에 관한 研究』全州大学校教育大学院硕士学位论文論文、2006.2  
や朴美淑『仁村 金性洙의 民族教育思想에 관한 研究』仁荷大学校教育大学院硕士学位论文論文、2002.8など

確認されるものの、普成専門学校のスポーツ活動について研究されたものは見当たらない。しかしながら、スポーツ活動と民族意識との繋がりについては李学来や西尾達雄の研究にも見られ、こうした朝鮮民族のスポーツ活動を西尾は「民族としての主体的活動」のひとつであったことを実証している。本研究ではそうした視角を引き継ぐと同時に、植民地期の民族系高等教育機関のスポーツ活動の意義を問うものとしても位置付けていく。

## ② 史資料について

史資料は『高麗大学校 70 年誌』や『六十年誌』などの学校誌、さらに当該期に発行されている『東亜日報』の記事などを中心に普成専門学校のスポーツ活動の実際を確認していく。また 1933 年以降に普成専門学校の校長となった金性洙の評伝などからもスポーツ活動の意義を見出そうとする。

当時の競技記録については上記の学校誌とともに『大韓體育會史』なども参考とする。

## ③ 金性洙について

金性洙は東亜日報グループ<sup>3)</sup>の中心人物であり、彼の人脈と資本の総体が東亜日報グループを形成し、植民地朝鮮において朝鮮民族をリードする役割を担った。

ただ現在、金性洙について語ることは非常に難しい。それは彼の評価が二分することからも理解できる。彼に対する評価のひとつは文化民族主義者<sup>4)</sup>として植民地期を生き抜き、朝鮮半島の近代化に寄与したとされる肯定的な評価であるが、一方で植民地期に対日協力<sup>5)</sup>を行ったとされる否定的な評価がなされている。<sup>6)</sup>解放後の政治的な活動が彼の評価を多様に彩ることになったのだとも考えられるが、ひとりの人物に対して対立するふたつの評価が存在することだけを取り上げても朝鮮半島の近現代史が複雑な様相を呈していることが理解される。ただこのことは日本による植民地支配の影響があることを前提にし

<sup>3)</sup>「東亜日報グループ」という言葉は木村によって用いられた言葉であり、木村は普成出身者の「政治活動の中心が東亜日報であったことを重視し、また、東亜日報こそが後の「正統保守野党」へと組織を提供したことに鑑み、「東亜日報グループ」という名称を用い」たとしている。本研究においては「東亜日報グループ」という言葉を用いることで、金性洙を中心とする朝鮮人民族主義者らの文化的活動の拠点となった全体を指し示すことを意図している。(木村幹著、『韓国における「権威主義的」体制の成立－李承晩政権の崩壊まで－』ミネルヴァ書房、2003、p.259)

<sup>4)</sup>金重洵は金性洙を文化民族主義者という位相に位置づけ、日本の植民地支配下での彼の活動が朝鮮半島における近代化を促進した点について肯定的に評価している。(金重洵著、『문단민족주의자 金性洙』一潮閣、1998)しかし、こうした金性洙の民族主義者というイメージは「金一族の出版帝国や教育機関の膨大な資料や影響力によって支えられてきた」(カーター・J・エッカート著、小谷まさ代訳、『日本帝国の申し子』草思社、2004、p.346)のであり、民族主義者の「民族」という言葉への問いかけをも含めて金性洙に対する評価を再確認する必要がある。

<sup>5)</sup>所謂「親日派」に関する問題はすでに多くの著作やレビューが出てきておりここでの言及は避けたい。ただ金性洙に関して彼の対日協力に関する言及は例えば以下のようなものがある。

ておかねばならない。

こうした金性洙に対する相異なる評価はみられるものの、彼を中心とする東亜日報グループが植民地期の朝鮮半島で行った事業の重要性は変わらない。東亜日報グループに関わる事業としては京城紡織、東亜日報社、普成専門学校の経営などがあるが、本研究においては普成専門学校に着目し、そのスポーツ活動について考察していく。



写真1. 金性洙像（東亜日報社）

「ある政党側では金性洙も戦時協力が多かったと言われ、親日派とされる。しかし戦時にある団体、ある種の集会などに金性洙の名義の出ていることは倭賊とその走狗が金性洙の名義を盗用したのだとされ、金性洙が出席、または承諾したことはなかったという。そして金性洙は朝鮮の教育事業、文化事業のための大いなる功労者であると同時に犠牲者である。（後略）」

（김학민, 정운현編, 『親日派罪状記』학민사, 1993, p.365）

上記は金性洙に対する評価のなかでも肯定的なものひとつであろう。彼を支持する論調は大凡このように金性洙の対日協力について弁護あるいは触れない傾向にある。しかし、カーター・J・エッカートが金性洙は「朝鮮人資本家の協力を要請する政府に対して何も抵抗もしなかった。それどころか一九二〇年以降、彼と総督府は蜜月の関係にあった」と結論づけているように彼の対日協力行為に関する批判は避けられない。ただこうした対立する評価は、政治的な立場・意図によってどちらかに偏ることが想定されるため、何れかの評価に与して語っていくことが適切であるとは思われない。

- ⑥ 鄭敬謨は大韓民国成立の淵源に金性洙らの存在を位置づけ、その後の国家への影響力が彼らに起因することを論じている。彼は金性洙らのブルジョア的性格を明確にすることにより、金性洙らに対する非難を強めている。一方でここでの言及は「朝鮮人民共和国」の建国を頓挫せざるをえなかった呂運亨に対する同情の念を強く感じさせるものでもある。金性洙らのブルジョア性を明らかにしていく点は首肯できるが、善悪の対立構造を明確にしたうえで語る論調は植民地期の知識人らの実態を単純化してしまう危険性があるように思われる。（鄭敬謨, 「悪の種子が蒔かれた頃－韓国ハイド性とジキル金性洙－」, 『シアレヒム』第4巻, p.4-28, シアレヒム社, 1982.4.）

## 2. 普成専門学校の経営引継

普成専門学校は現在の高麗大学の前身である。金性洙の教育事業のなかでも最も代表的な事業としてこの普成専門学校の経営が挙げられよう。

そもそも普成専門学校は 1905 年に李容翊によって創設された私立学校であった。そして、その 5 年後の 1910 年には孫秉熙を代表とする天道教会が経営を引き受け、1921 年には財団法人として認められるようになるなど、天道教会の力を背景に植民地社会内での発展をみせていた。しかし、財団法人内での内輪揉めや寄付金がうまく集まらなかったことが影響し始めてくると学校そのものの存立に翳りが見え始める。法人側はこうした危機を脱するために学校経営を引き受けてくれる有志を求めることになったのである。

そこで 1932 年に普成専門学校の経営を引き継ぐことになったのが財団法人の中央学院<sup>7)</sup>であった。『東亜日報』の社説には「普成専門校の曙光」と題してこの時のことが記されている。

維持難中にあった普成専門学校は该校理事会と評議會の一致可決で財団法人中央學院の設立者である金祺中、金暻中兩氏に引継されること決定し再昨日發表された。これは財団法人中央學院設立者から中央高等普通學校を經營する巨大な財産を犠牲にした金祺中、金暻中兩氏が普成専門學校の經營引継交渉に對してその基金に約六十萬圓可量を出捐することを快諾したことに因るのである。

普成専門學校がこうして永久に安全になったことはただ普成専門學校及びその關係者だけの幸いにあらず、真に朝鮮教育界の面目を保ったと言える<sup>8)</sup>。

このように財団法人中央學院に普成専門学校の経営は委託され、その校長に金性洙が着任することになったのである。金性洙は定員超過募集事件で引責辞任した 1935 年と翌 1936 年の 2 年間を除く解放までの期間を普成専門学校の校長として在職している。

<sup>7)</sup> 財団法人中央學院は 1929 年に成立している。

<sup>8)</sup> 『東亜日報』1932 年 3 月 29 日

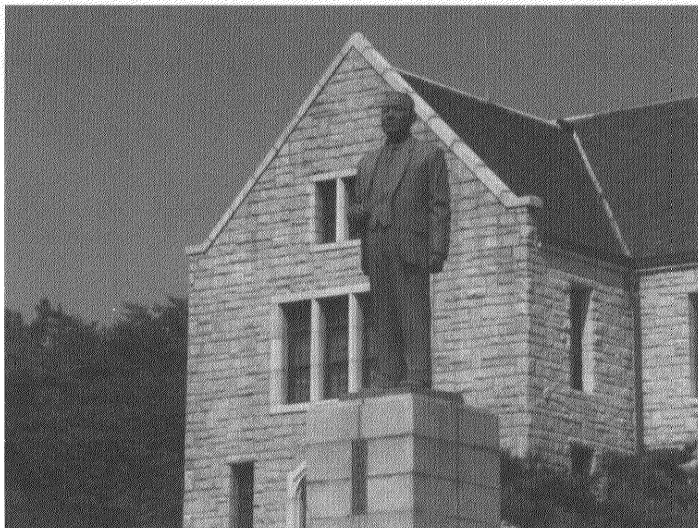


写真2. 金性洙像（高麗大学校）

校長となった金性洙は普成専門学校の中興策の一環として体育の振興を重視したとされる。それは普成専門学校の教育目標として知・徳・体の三大要素が尊重され、学友会においても綱領に「我々は智・徳・體 三育の協調に基づく人格の完成を期する」とあり<sup>9)</sup>、こうしたことから体育・スポーツが教育のひとつの要として認識されていたことが分かる。またこのことについて『仁村金性洙傳』では体育・スポーツが「民族」と結び付けられて説明されている。

ほかの分野ではまず施設や機会にあって源泉的に日人たちとの差別があったためこれを克服して彼らを凌ぐことは難しいことだった。しかし體育にあっては比較的差別が作用する餘地がないため、對等な條件で即座に競ってみることができたのであった。運動競技で日本學生を凌ぎ、打ち負かすということは民族の矜持と自信を取り戻す契機であり、運動場での勝利は民族の希望を植えつけるすべであった。仁村が普專學生たちに願ったことは、本館入口の虎象が象徴する雄健な氣象<sup>ママ</sup>であり、それは強靱な体力から出るのであった。彼が體育を重視したことは教育というのは元來知・徳・體の三位一體からその完成を期するという原理も原理であるが、それよりも民族の現實的要請のためであった<sup>10)</sup>。

<sup>9)</sup> 高麗大学校六十年史編纂委員會編、『六十年誌』高麗大学校，1965，p.225

<sup>10)</sup> 仁村紀念會編、『仁村金性洙傳』仁村紀念會，1976年，p.361-362

日本の植民地支配の齎した影響は朝鮮の人々の心的な状況にまで及んでいたのであり、そのためスポーツには日本人からの差別によって形成される劣等感を競技での勝利によって払拭し、民族の自信を取り戻すところにその意義を見出していたという点が確認される。

では上記で言われる普成専門学校のスポーツ活動は如何なるものだったのか。次にその実際を確認してみたい。

### 3. 体育部の推移

普成専門学校の体育部の活動は当初学生会活動のひとつであった。三・一運動の影響もあり、学生運動に対する総督府当局の監視は厳しかったが、スポーツに関してはそうした監視や双方の摩擦がなかったため、1920年以降、朝鮮体育会や各新聞社が主催・後援する競技大会が開催されるようになると各種の運動部がそれら競技大会に参加するようになる<sup>11)</sup>。

こうした競技会での活躍は抑圧された「民族」の鬱憤を晴らす場となっていたが、一方で学校内部においては運動部の選手偏重主義が問題となり、運動の大衆化が要望されるようにもなっていた。それに応じて学校当局は1929年に学生会の管理で運営してきた運動部を学校当局で管理することにしたのである。しかし、1年と経たない間に再び学生会へとその運営管理を戻し、その後3年を経た1933年になり、運動部を完全に学校当局で管理することになる<sup>12)</sup>。1933年という時期を鑑みると、金性洙の校長就任とともにそれまで曖昧であった体育部の運営管理体制も整理され始めたとみていいだろう。こうして置かれた体育部の体育部規定をみてみると以下の通りである。

- 一、本校ニ體育部ヲ置ク
- 二、體育部ノ經費ハ生徒ヨリ徴収スル體育費及本校ノ補助金ヲ以テ支辨ス
- 三、生徒ヨリ徴収スル體育費ハ一人額五圓五十錢トシ授業料納期ニ從ヒ相當割合ノ金額ヲ授業料ト同時ニ納入セシム
- 四、體育部ニ蹴球・ラ式蹴球・庭球・籠球・陸上競技・柔道・剣道・水泳及卓球ノ各部ヲ置ク

<sup>11)</sup> 高麗大学校六十年史編纂委員会、前掲書、p.169

<sup>12)</sup> 高麗大学校六十年史編纂委員会、前掲書、p.466-477

五、 體育部ノ各部ニ部長一人ヲ置ク

部長ハ教員中ヨリ學校長之ヲ命ス

六、 各部長ハ必要ニ依リ生徒中ヨリ委員ヲ任命スルコトヲ得

部長委員ヲ任命シタルトキハ直ニ學校長ニ報告スヘシ<sup>13)</sup>

上記の規定は 1937 年度のものであるが、金性洙が校長に就任していた時期の規定として確認されるものである。これをみると学校当局により体育部の合理化が図られ、各運動部を体育部に所属するものとして運営管理していくようになったことが分かる。またこのように体育部を体系的に改編することによって運動選手本位であったスポーツを一般学生らに対しても「體力増進と運動精神普及・涵養」に資するものとして位置付けていったのである<sup>14)</sup>。

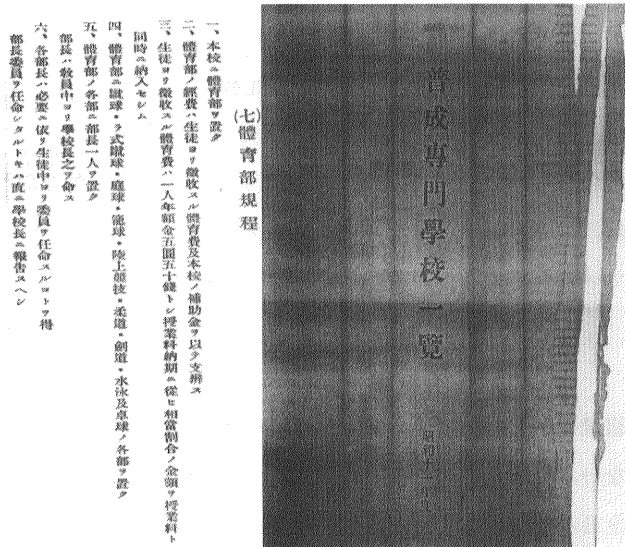


写真 3. 普通専門学校一覽 (昭和 11 年度) 「体育部規程」

しかし、1940 年になると日本の戦時体制が進行するとともに国民総力連盟が各機関に設置されることになり、12 月には当局の命令により「國民總力普成専門學校聯盟」が組織される。そのためそれまでの体育部は解消され体錬部となる。この体錬部には柔道部・劍道部・力道部・山岳部・ア式蹴球部・ラ式蹴球部・庭球部・陸上競技部・卓球部・排球

<sup>13)</sup> 『普成専門学校一覽』昭和十一年度、p.43

<sup>14)</sup> 高麗大学校六十年史編纂委員会、前掲書、p.234

部・送球部・水泳部・氷上部が置かれたが、競技大会などに出場する余裕はなくなったとされる<sup>15)</sup>。ただこの頃になると各種競技大会そのものが次々に廃止されるようになってきていたため、そうしたことも競技大会に出場できなくなった理由のひとつとして挙げられよう。

このように普成専門学校の体育部は1930年代に金性洙が校長となったのと軌を一にして部の合理化が図られたものの、その数年後には総督府当局の命令により戦時体制に見合う組織の改編がなされたのである。

#### 4. 各競技団体の活動

それでは各運動部は当該期においてどのような活動をしていたのだろうか。以下ではいくつかの代表的な競技団体の活動を取り上げて検討したい。

植民地期の朝鮮半島におけるスポーツは1930年代に目覚ましい発展を遂げている。ここでいう発展とは宗主国たる日本の競技レベルと比較しても遜色なく、あるいは宗主国側以上の競技レベルに達していたことを指す。このことは日本人の目からみても明らかであった。1934年に竹内は当時の朝鮮半島におけるスポーツの近代的発展を報告しており、そのなかで陸上競技、ラグビー、蹴球、アイススケート、アイスホッケー、庭球などの競技について触れている。そのなかの蹴球と庭球について触れている部分をみると以下の通りである。

更にア式蹴球は朝鮮の國技とも言ふべく、その技術は決して内地のそれに比して優るとも劣らない。目下全鮮的に統一を遂げ得て、その技は増々研究されつゝある。恐らく今後日全日本の蹴球を代表するものは我々の半島から出るであらう。(中略)

更に軟式庭球に於ては昨年明治神宮各府懸對抗に優勝し、今年伊勢神宮競技に於ても再勝し名實共に全日本の斯界の中心は半島に移つた感がある<sup>16)</sup>。

竹内によるこの蹴球に対する暗示めいた記述は時を経ずして見事的中することになる。すなわち翌年の京城蹴球団の活躍である。

1935年に開催されたサッカーの全日本選手権は1936年のベルリン・オリンピックの選

<sup>15)</sup> 高麗大学校六十年史編纂委員会、前掲書、p.241-242

<sup>16)</sup> 竹内一、「黎明の半島體育・スポーツ界を語る」、『體育と競技』、p.199、大日本體育學會、1934.12.



手選考も兼ねていた。この大会、決勝まで進んだのは東京文理大と朝鮮半島から出戦した京城蹴球団であった。両者の対戦結果は6-1という圧倒的な大差で京城蹴球団が勝利し、その年の優勝を果たしている<sup>17)</sup>。実はこの京城蹴球団の主力メンバーのなかに普成専門学校の金容植・朴奎楨・金炳禧・裴宋鎬・康基淳・高鴻寛ら6名が入っていたのである<sup>18)</sup>。このなかでも特に金容植はベルリン・オリンピックの代表選手にも選ばれるなどその活躍は目を見張るものであった。

上記のように、この頃の普成専門学校の蹴球部には非常に優れた選手が多く、朝鮮半島内で開催されていた1932年の朝鮮体育会主催の第13回全朝鮮蹴球大会、1934年の大阪朝日京城支局主催の第8回全朝鮮ア式蹴球大会、1936年の朝鮮蹴球協会主催の全朝鮮蹴球選手権大会などの各大会で優勝しており、また朝鮮体育協会主催の朝鮮神宮競技大会では1933年、1934年の第9回、第10回大会、1936年の第12回大会においても優勝するなど多くの優れた成績を残している<sup>19)</sup>。

こうした競技における活躍の他にも普成専門学校の蹴球に関わる活動のなかに学校自体が主催して全朝鮮中等学校蹴球大会というスポーツ大会を開催している点は注目される。この大会は1928年から開催されており、高等普通学校を中心に朝鮮人の子弟らが所属する中等学校が参加の対象とされていた。大会の主旨はサッカーの普及と青少年体育の発展であり、1940年の13回大会まで継続して行われている<sup>20)</sup>。またこの大会には前述した金容植・金炳禧・高鴻寛らのように後に普成専門学校の蹴球部で活躍するような選手も多数参加していたことが確認されるのである<sup>21)</sup>。

先に挙げた竹内のもうひとつの言及に戻ろう。竹内は庭球に関して明治神宮競技大会、ならびに伊勢神宮競技大会での朝鮮半島からの選手の活躍について触れていた。この年、このふたつの大会で優勝したのは、普成専門学校庭球部の千季根・盧炳翼組だった<sup>22)</sup>。彼らの活躍に牽引されて普成専門学校庭球部は1940年まで黄金時代を迎えたとされ、各競技大会においても優れた成績を残している。因みに千季根・盧炳翼組に関しては1934年、1935年の朝鮮軟式庭球連盟主催の全朝鮮学生軟式庭球選手権大会第1回、第2回大会で優勝しており、普成専門学校庭球部としては朝鮮学生庭球連盟主催の高専庭球連盟戦

<sup>17)</sup> 日本体育協会編、『日本スポーツ百年』日本体育協会、1970、p.240

<sup>18)</sup> 高麗大学校六十年史編纂委員会、前掲書、p.473

<sup>19)</sup> 大韓體育會、前掲書、p.525-648

<sup>20)</sup> 高麗大学校70年誌編纂室編、『高麗大学校70年誌』高麗大学校、1976、p.423

<sup>21)</sup> 大韓體育會、前掲書、p.577-578

<sup>22)</sup> 高麗大学校六十年史編纂委員会、前掲書、p.502

において、その第2回大会（1936年）から第5回大会（1939年）までの4大会を連続して優勝している。この時期はまさに全盛期であったと言えるだろう。



写真4. 当時の体育部（左が蹴球部、右が庭球部）

普成専門学校のスポーツ活動なかにはもうひとつ偉業をなした運動部が存在する。それは籠球部である。

朝鮮半島のバスケットボール界は普成専門学校と延禧専門学校とが鎬を削りながら発展させていったが、まずその檜舞台に立ったのは延禧専門学校であった<sup>23)</sup>。ここでもベルリン・オリンピックの存在は大きい。

1932年、ロサンゼルスでのIOC総会で1936年のベルリン・オリンピックからバスケットボールが正式種目として採用されることになったため、京城蹴球団が活躍したのと同年の1935年、第15回バスケットボール全日本選手権はオリンピックの選手選考を兼ねた大会でもあった。この大会で優勝を果たしたのが延禧専門学校だったのである<sup>24)</sup>。結果、延禧専門学校の選手のうち李性求、廉殷鉉、張利鎮の3名が代表選手に選ばれ、ベルリン・オリンピックに参加している。

普成専門学校の籠球部が活躍するのはこのベルリン・オリンピック後のことである。蹴球部と違い、1934年、1935年は籠球部の沈滞期であった。籠球部はベルリン・オリ

<sup>23)</sup> 1933年時の延禧専門学校のバスケットボールが『大日本體育協會史』のなかで紹介されている。それによるとワシントン州立大学のウィリアム金という人物から半年間の指導を受け、セットプレイやゲーム運びが巧みになってきていたことが窺える。（大日本體育協會編、『大日本體育協會史 下巻』大日本體育協會，1937，p.1265）また『연세대학교사』では1931年にアメリカから朝鮮に來た在米朝鮮人2世の정봉운という人物によってスクリーンプレーを教授されたことが記載されている。

연세창립주년기념사업위원회편, 『연세대학교사』연세대학교출판부, 1969, p.1157)

<sup>24)</sup> この大会に選抜されている選手らはOB選手も含まれているため競技記録中には「全延禧」と記載されている。本文中では学校名である「延禧専門学校」を用いた。

ピックには間に合わなかった。その翌年の 1937 年から普成専門学校籠球部の大躍進が始まる。

1937 年、第 17 回の全日本選手権の決勝は普成専門学校と延禧専門学校によって争われた。結果はほとんど点差がなく 43-41 という僅差であったが、普成専門学校が初優勝を果たしたのである<sup>25)</sup>。この年の決勝戦がともに朝鮮半島から出戦してきた学校同士であったことも当時の朝鮮における競技レベルの高さが窺えよう。

普成専門学校籠球部の活躍はこの大会だけに止まらなかった。その翌年の全日本選手権でも優勝を果たし、続く 1939 年の第 19 回大会でも優勝し、全日本選手権 3 連覇という偉業を成し遂げたのである<sup>26)</sup>。この記録は 1921 年から 1923 年の東京 YMCA の記録に並ぶ<sup>27)</sup>が、競技レベル向上の推移、また普成専門学校が植民地支配を受ける環境のなかで成し得た成績である点を踏まえると、後者のそれと同列には語れない。

このようにいくつかの競技団体の活動をみてきたが、普成専門学校の各競技団体は競技レベルを向上させ、宗主国である日本の選手・競技団体に対しても引けを取らず、1930 年代には数々の大会において優れた成績を残している。このことはスポーツがオリンピックという国際舞台を中心に、発展した自国の存在感を示す一機会になっていたことを鑑みると、朝鮮半島ではこうしたスポーツでの活躍は植民地支配者への抵抗という意味と同時に朝鮮「民族」の発展の物語でもある。普成専門学校のスポーツでの活躍はその物語のひとつとして捉えることができよう。

## 5. スポーツ選手の特別入学

普成専門学校では当時から特別入学という制度が存在していた。『六十年誌』には植民地期の普成専門学校のスポーツ活動が日本の政治的権力に対するレジスタンスの意味を持つものであったとしたうえで「學校当局はこうした體育活動の意義を勘案して選手の特別入学を許可して」と記述されている<sup>28)</sup>。また日本の植民地支配からの解放後は上記のような意味がなくなったため、大学体育の見直しが図られ、「運動選手の特別入学の廃止および學業の勸奨など選手の體育精進に多くの制約が加えるように」<sup>29)</sup> になったとあり、

<sup>25)</sup> 日本体育協会、前掲書、p.351

<sup>26)</sup> 高麗大学校六十年史編纂委員会、前掲書、p.479

<sup>27)</sup> 日本バスケットボール協会編、『バスケットボールの歩み』日本バスケットボール協会、1981、p.86

<sup>28)</sup> 高麗大学校六十年史編纂委員会、前掲書、p.465

<sup>29)</sup> 高麗大学校六十年史編纂委員会、前掲書、p.466

植民地期に普成専門学校がスポーツ選手を特別入学といった制度で獲得していたのは明らかである。

普成専門学校の入学に関する規定の第 11 条には「學校長ニ於テ必要アリト認ムルトキハ前條ニ該當スル入學志願者ニ就キ口頭試問身體検査及學力試験ヲ行ヒタル上入學許可ノ決定ヲ爲ス」<sup>30)</sup>とあり、通常の入学とは違った入学の方法が当時から存在していたことが窺える。規定上での特別入学を指すとすればこの第 11 条であろう。またこの規定では校長の意向が強く反映するものであったとことも分かる。

前述した普成専門学校の籠球部の活躍はこうした特別入学がその背景にあった。1934 年、1935 年に奮わなかった籠球部は実に 19 名もの選手を平壤・開城・ソウルの各所から集め、その後の全日本選手権 3 連覇を導くことになったのである<sup>31)</sup>。このとき活躍した趙得俊・李好善・呉寿喆・呉重烈・安昌健らは昭和 12 年度 (1937 年) から昭和 15 年度 (1939 年) の期間、最優秀選手若しくは優秀選手として日本籠球協会から表彰されており<sup>32)</sup>、全日本代表としても活躍している。

また陸上競技部にも 1937 年の記録から特別入学の選手が確認される<sup>33)</sup>。「民族」の英雄、孫基禎である。孫基禎はベルリン・オリンピックのマラソンで金メダルを獲得した植民地朝鮮のまさに英雄だった。しかし、彼はベルリン・オリンピック後にいわゆる日章旗抹消事件<sup>34)</sup>という事件が発生したため、植民地朝鮮に衝撃の走るその渦中に身を投じねばならなかった。孫基禎は「民族」にとっての英雄であると同時に総督府当局にとっては要注意人物だったのである。

当時の孫基禎はなんとも表現できない心持ちで生活せねばならず、日章旗抹消事件の東亜日報社を思い起こし、金性洙に会うことを決意したという。そして、桂洞の金性洙宅を直接訪れ、普成専門学校への入学を願い出たと回想している<sup>35)</sup>。こうして普成専門学校

<sup>30)</sup> 『普成専門学校一覽』昭和十一年度、p.31

<sup>31)</sup> 高麗大学校六十年史編纂委員会、前掲書、p.478

<sup>32)</sup> 昭和 12 年度には最優秀選手に趙得俊、優秀選手に呉寿喆、呉重烈が、昭和 13 年度には最優秀選手に李好善、優秀選手に趙得俊、呉寿喆が、昭和 14 年度には最優秀選手に呉寿喆、優秀選手に趙得俊、李好善、呉重烈、安昌健らがそれぞれ選出されている。(日本体育協会、前掲書、p.347)

<sup>33)</sup> 普成専門学校陸上部は 1937 年の京・水間駅伝競技大会で 1 位、全朝鮮陸上競技大会でも優勝という記録を残しており、その当時の記録から選手のひとりとして孫基禎が参加していたことが分かる。(高麗大学校六十年史編纂委員会、前掲書、p.490) また、『高麗大学校 70 年誌』においても「1937 年からは孫基禎が入校して普専陸上の地位を高め」たとある。(高麗大学校 70 年誌編纂室、前掲書、p.438)

<sup>34)</sup> 朝鮮中央日報社と東亜日報社らが表彰式時の孫基禎選手の胸にある日本国旗 (日章旗) を消して同社の新聞へと掲載したことが問題となり、前社は自粛後そのまま倒産、後社は無期限発行停止処分を総督府当局から受けるという一大事件となった。

<sup>35)</sup> 東亜日報社編、『仁村金性洙』東亜日報社、1986、p.370-371

に入学した孫基禎は1937年の陸上部の活躍に助力することになったのである。



写真5. 桂洞に残る金性洙旧居

このように孫基禎のような有名選手でさえも普成専門学校に迎え入れられたのであった。しかも「民族」発展の象徴であり、当局から要注意人物とされる孫基禎を入学させるということの意義は決して小さなものではなかっただろう。

普成専門学校のスポーツ選手の獲得を促す特別入学という制度は当該期のスポーツ競技での活躍に欠かすことのできない制度であったと思われる。それにより朝鮮半島の各所から才能ある朝鮮人青年を集め、時には朝鮮半島で、時には日本で普成専門学校のスポーツでの活躍を創造していったのである。

## 6. まとめと考察

本研究は植民地朝鮮において朝鮮人の高等教育機関であった普成専門学校のスポーツ活動の実態について明らかにした。

明らかになった点をまとめると以下の通りである。

- ① 金性洙は1932年に普成専門学校の経営を引き継いでからは校長として教育事業に携わり、体育・スポーツを普成専門学校の中興策のひとつとして重視した。
- ② 普成専門学校におけるスポーツ活動での活躍は支配を受ける朝鮮人の劣等感を払拭する機会となっていた。

- ③ 日本の戦時体制が進行してくると体育部は解消されて体錬部となり、各競技大会へ参加する余裕はなくなってきた。
- ④ 普成専門学校の体育部のなかでもとりわけ蹴球部、庭球部、籠球部の活躍は目覚ましく、日本の国家代表としても選ばれるほどの選手らが存在した。
- ⑤ 普成専門学校では特別入学という制度があり、才能あるスポーツ選手を朝鮮半島全土から獲得しており、また孫基禎のような有名スポーツ選手の入学も確認された。

朝鮮半島の植民地期においてスポーツは如何なる機能を果たしえたのか。為政者の側からスポーツの機能を解していくならば、植民地権力を強化する装置として機能し、社会事業のひとつとしても位置付けられていた点が確認される。本研究では視点を換え、支配を受けた側がスポーツをどのように捉えていたのかという点から考察していくものであった。

普成専門学校に着目したのは当該期において普成専門学校が朝鮮民族を代表する高等教育機関であり、朝鮮人エリートを養成していく重要な機関であったからである。そこに1932年以降は金性洙が校長として就任し、教育事業を展開していったのである。植民地期における彼の行動は現代においてはそれぞれの立場により肯定的にも否定的にも評価されているが、この教育事業に携わったことが企業家としての金性洙だけではなく、教育者としての金性洙の存在を後世に伝えることになった。「文化民族主義者」という称号はこのことに由来するものでもあり、また民族に近代化の風を齎したということがその背景にある。それが彼の財力を保持・増強するものであったとしても、である。本研究においては金性洙に対する評価を下したうえで研究に臨むといったものではなかった。あくまでもスポーツが当該社会においてどのような機能を果たしたのかに焦点を絞った。

植民地という状況を考えると当然のことながらスポーツに付与される役割として植民地権力に対する被支配民族の「抵抗」が挙げられる。本研究でみてきたように普成専門学校のスポーツ活動はそういう意味では宗主国である日本に対して十分な成果を上げたといえることができる。しかし、こうしたスポーツ活動は「抵抗」だけを意味したのではなく、スポーツでの成功が民族の「発展」という意味合いを持ったということが本研究において考察された点であった。これは近代化(=発展)を促そうとした朝鮮人エリートたちの価値観と符合する部分でもあり、1920年代に展開された民族改造論の延長線上に位置していると考えていいのかも知れない。普成専門学校のスポーツ活動は民族の価値観を体現する文化的活動のひとつだったのである。